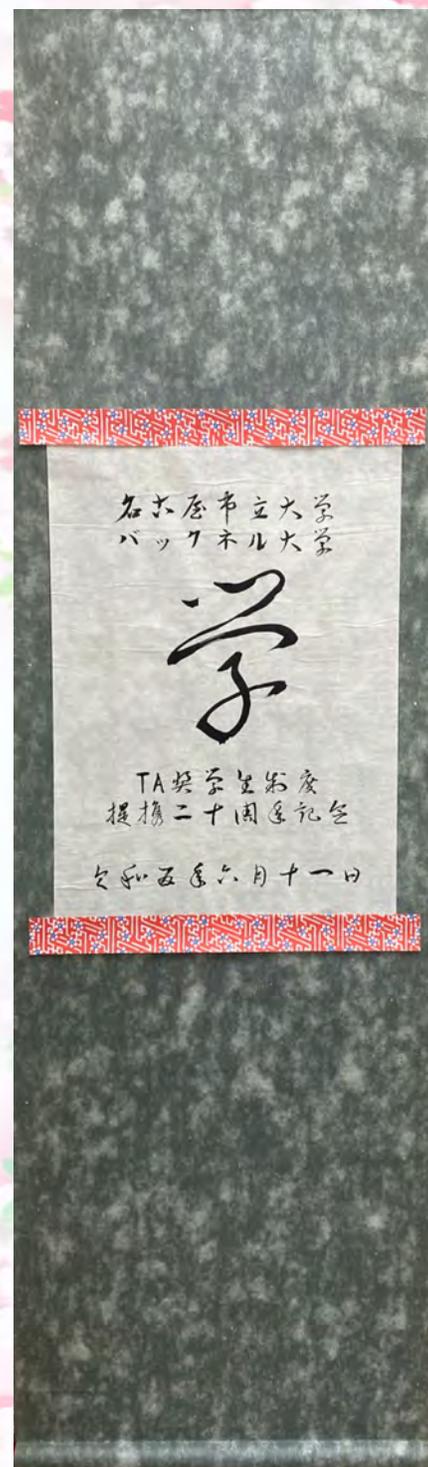


The Bucknell University / Nagoya City University
TA Fellowship

バックネル大学・名古屋市立大学
TA奨学生制度 20周年記念誌



2023年6月に行われた「20周年の集い」に
向けて本学に贈られたバックネル大学
アームストロング先生直筆の掛け軸です

はじめに

国際文化学科オリジナルプログラムである『バックネルTA奨学生制度』が
スタートしてから20年が経ちました。

2024年3月時点で、現在派遣中の第19期2名を含め、延べ28名の学生を
バックネル大学に派遣しています。

これを記念して、これまでの軌跡と未来へのメッセージを伝えます。

バックネル大学TA奨学生制度 20周年記念誌
The Road to Bucknell
～The First 20 Years and Beyond～

● も く じ ●

Chapter 1	「バックネル大学TA奨学生制度」の歩み	1
Chapter 2	歴代TA一覧とメッセージ	2
Chapter 3	教員からのメッセージ	11
Chapter 4	バックネル大学との学術交流	14
Chapter 5	フォトギャラリー 思い出の写真集	20

Chapter 1

「バックネル大学TA奨学生制度」の歩み

バックネル大学TA奨学生制度の概要

アメリカの歴史ある大学で

日本語を **教える** × 学生として **学ぶ**

そのどちらも経験できるのがこの制度です



▶バックネル大学 (Bucknell University) は、アメリカ合衆国ペンシルベニア州ルイスバーグにある1846年創立の歴史ある大学です。このバックネル大学と名古屋市立大学人文社会学部は2004年11月に覚書きを取り交し、2005年度から毎年、国際文化学科の学生をバックネル大学に日本語のティーチング・アシスタント (Teaching Assistant: 略してTA) として9ヶ月間 (8月から翌年5月まで) 派遣する奨学生制度を開始しました。それが『バックネル大学・名古屋市立大学 TA奨学生制度』 (The Bucknell University/Nagoya City University TA Fellowship) です。

▶日本語のTAを務めながら、自分でも好きな授業を各学期1科目履修でき、授業料、寮費、食費 (素敵なカフェテリアで土日も食べ放題)、往復の渡航費など諸経費のほとんどと、約\$7,200の奨学金が支給されるプログラムです。

▶TAとしては、日本語プログラム担当教授の指導のもと、授業、教材作成、採点等に従事します。ティーチング・アシスタントという名前ですが、教授が行う授業にアシスタントとして参加するのではなく、派遣学生が教員として一人で会話中心の授業を行います。毎回、学生のパフォーマンスを評価する重要な役割も果たしています。正真正銘の先生で、責任は重大です。

▶学生としては、各自の興味関心に合わせて授業を履修することができます。中国語、イタリア語、フランス語、スペイン語といった外国語を学んだ人もいれば、女性学、児童英文学、美術史、写真学、ジャズの歴史、日本近代史、翻訳論、心理言語学、ダンス、教育学、環境学、プログラミングなどの講義を受講した人もいます。2学期の留学ですが、1学期目の授業で単位が取れないと、TAは続けられず帰国しなければなりませんので、みんな必死です。幸い、第19期TAまで途中で帰国した人は一人もいません。

▶バックネル大学には、日本語のTAだけでなく、中国語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語など多くの言語のTAもいて、すぐに親しくなり行動を共にする機会も多く、アメリカに居ながらにして実に多様な異文化体験ができます。しかも周囲に日本人はほとんどいませんので英語で生きていくしかない環境です。まさに国際文化学科の学生にとって理想的な経験を提供してくれるプログラムです。

制度のはじまり

▶この制度の発足には国際文化学科の一人の卒業生の存在と活躍が大きく関係しています。2003年3月卒の三宅早季さんが、2003年8月から2年間、バックネル大学で日本語のティーチング・アシスタントとして活動してくれました。彼女がバックネル大学から高い評価と信頼を得てくれたおかげで、国際文化学科との本制度についての話し合いが始まりました。私たちは、敬意と感謝の念をこめて三宅さんを「第0期TA」と呼んでいます。

▶その後、2005年から第1期生の派遣が始まり、毎年1名の学生を受け入れてもらい、2011年の第7期生から2名を受け入れてもらっています。現在 (2024年3月)、第19期生TAを派遣中です。

歴代TA一覧

期	派遣期間	氏名（派遣時）
第0期	2003/08－2005/05	三宅 早季
第1期	2005/08－2006/05	三尾 友紀
第2期	2006/08－2007/05	藤田 とも子
第3期	2007/08－2008/05	桜川 麻木
第4期	2008/08－2009/05	常田 夏希
第5期	2009/08－2010/05	井波 絵梨
第6期	2010/08－2011/05	間宮 百合絵
第7期	2011/08－2012/05	盛田 博子 清水 美有
第8期	2012/08－2013/05	纈纈 安美 神内 未菜美
第9期	2013/08－2014/05	勝田 知里 鈴木 桃子
第10期	2014/08－2015/05	岸川 侑磨 田川 朋
第11期	2015/08－2016/05	福本 若菜 安井 泉帆
第12期	2016/08－2017/05	野津 寛輝 黒葛野 隼人
第13期	2017/08－2018/05	野津 寛輝 中川 裕基
第14期	2018/08－2019/05	亀山 涼香 大野 愛希
第15期	2019/08－2020/05	榎本 愛生 相原 光志
第16期 第17期	(2020/08－2021/05) (2021/08－2022/05)	近藤 里帆 長馬 くるみ
※新型コロナウイルスの感染拡大により派遣中止		
第18期	2022/08－2023/05	高木 萌々佳 井上 恵美里
第19期	2023/08－2024/05	大和 礼奈 小竹 若菜
第20期	2024/08－2025/05 (予定)	



第0期

三宅 早季

人生のドア



アメリカの中学校で教壇に立つ現在の様子

2003年にTAとして派遣された時の記憶は遠いものとなりましたが、バックネルに向かうバスの中で、凍えるエアコンと不安で奥歯を噛み締め、しばらく痛かったのを覚えています。

あれから20年以上経ち、「人生の答え合わせ」について最近よく考えています。TAになるのは私には大きな決断でしたが、クラスでは思いついたアイデアを教案にしてやってみて失敗したり成功したり、その繰り返していつの間にか2期が過ぎ、派遣制度が出来て20年経ち、そして今、アメリカの中学校で日本語を教えています。

バックネルのTAになってから、私の前にはドアがあってそれが勝手に次々開くままにそちらに進んできました。後輩TAたちも今、様々な分野でご活躍されていますが、そのルーツはバックネルでの経験にあるはずで、これからTAを務める後輩には、バックネルで何か自分に合うドアを見つけ、その後の人生につながっていく道を辿ってほしいと思います。

第2期

藤田 とも子

TA生活を生かして



2023年6月に開催された「20周年の集い」にて

20周年おめでとうございます。

時が経つほど、このような素晴らしい制度を学生の私たちに任せてくださる先生方の偉大さを感じ、心より感謝申し上げます。

私は現在公立の中学校で英語を教えています。TA生活で学んだ授業づくりや、多様性を認め合う他のTAとのコミュニケーションは、今の仕事に大いに生かされています。また、私が勤務する中学校にはネイティブスピーカー（NS）といて、TA制度のように英語話者を迎え、彼らと一緒に一年間授業をします。

私は彼らと接するときにはいつも、アームストロング先生が私にしてくれたように接することを心がけています。日々の雑談からコミュニケーションをとったり、悩みを相談しあったり、NSが自分らしく働けるように周囲との関係性や居場所作りを心がけています。

この制度が今後も続くことで、多くの学生さんがTA生活から価値ある学びを得て、人生を豊かにされることを心より願っています。

第4期

常田 夏希

一生の宝物をくれたバックネル



私がバックネル大学でTAをしていた頃から15年が経ちましたが、当時の仲間とは今も連絡を取り合う特別な友人でいられる事を嬉しく思います。バックネルでの生活は、忙しくて、毎日が勉強で、楽しくて堪らない10ヶ月でした。

外国で大学生に授業をするというのは、初めてで戸惑う事もありましたが、一生懸命学ぼうとする学生達のお手伝い出来る事は、大変な中にもとてもやりがいがありました。一人では難しい時は、優しい先生や、世界中から集まったTA仲間が親身になって相談に乗ってくれました。

10ヶ月という限られた期間でしたが、そのチャレンジや苦労、努力、助け合った事や楽しかった思い出の全てが宝物であり、その後の人生において私を支えてくれていると感じます。

留学の仕方は様々ありますが、TA奨学生制度は大学を通してこそ出来る特別なプログラムだと思います。この制度が今後も続き、多くの後輩が素晴らしい経験をする事を願っています。

第5期

井波 絵梨

Connecting the dots



左から3人目が井波さん

私がTAとしてバックネル大学にいたのは、もう14年も前のこと。それでも、あの刺激的な日々は、昨日のことのように思い出されます。友達と夜遅くまで図書館で勉強したこと、TA仲間と語り明かしたこと、日本語クラスの教材を手作りしたこと、英語が分からなくて苦労したこと…。あの時の頑張りと思うと、どんなことも乗り越えられる。バックネルでの体験の一つひとつが、今の私を支えています。

現在、私はメーカーで社内報を担当しています。従業員に会社の情報を楽しく、分かりやすく伝える。それが私の仕事。TAとして、日本語に向き合ってきた経験が生きています。

Connecting the dots.

あの時は必死で、バックネルでの日々がその後の人生にどう生かされるか、分かりませんでした。でも、振り返ってみると分かる。点と点は繋がっている。驚くほど、鮮やかに。

第6期

間宮 百合絵

自分自身に誠実でいること



前列右から3人目が間宮さん

入学以来目標だったBucknell、いざ渡米すると言葉が通じない焦り、孤独…けれどLofgren先生やElizabeth先生、学生や各国の友人達…誰もが「ただ生きている」のではなく、好き・夢中・目標といった、その人たらしめる幹となるものをもっていました。それを堂々と語るカッコ良さ！惜しまない努力！「自分に誠実なこと」はこんなに輝いていて美しいんだ！

Bucknellで多くの経験をしたけれど、この衝撃と興奮と感激は忘れられません。当初のネガティブな気持ちを乗り越える強い支えとなりました。卒業後社会に出て、惰性がうようよ蔓延る世の中にショックを受けましたが、Bucknellでの経験はそんな世の中にも染まりきらず自分の幹を持ち続ける自信と誇りになっています。Bucknell派遣前から現在まで刺激と憧れを与えて続けてくれる方々に心からの尊敬と敬意を、そして今後のTA達に希望を感じています。

第7期

清水 美有

世界が広がるキッカケとなったTA派遣



人生のターニングポイントは？と聞かれたら、私は真っ先に「バックネル大学での経験」と答えます。

まず、「積極的に自ら掴みに行く意識」を持てたこと。履修していた「Classic Jazz」の授業では、周りの生徒の流暢な英語に圧倒され、正直苦しかったです。教授に質問しに行き、授業中に勇気を出して発言したりなど、食らい付いていたことは今では良い思い出です。

そして、スペイン語のTA、チリ人のMacarenaとの出会い。彼女とは一番仲良くなり、チリ料理やスペイン語、サルサダンスを教えてもらいました。帰国後、彼女を訪ねてチリに旅行しました。Macaの人柄と南米文化に惹かれ、現在私は、チリ料理を出す「ラテンスパイス料理店」を岐阜で開業するに至りました。

キャンパス中に色々なチャンスが転がっています。多様な価値観を持つ仲間と積極的に関わることで、人生を今よりもっと面白く、幅広いものにできますよ。

第8期

瀬瀬 安美

一生忘れられない宝物の時間



左から2人目が瀬瀬さん
(3人目は同期の神内さん)

期待と不安を抱えながら挑んだバックネルTA制度でしたが、すべてが新鮮でドキドキに満ちた時間を過ごすことができました。同時派遣であった神内さんと授業づくりに励み、いい授業ができて生徒のみんなが楽しんで学んでくれたときの喜び、世界各国から集まった留学生のみんなとイベントに参加したりごはんを一緒に食べたり、自分の人生の中の忘れられない宝物です。

就職先は金融関係のため直接英語に関わることはありませんが、取引先での研修を行う場面等でほめて頂くのはTAとして壇上に立ち続けた賜物かな、と感じています。

私生活ではバックネルで出会ったブラジル人の彼と10年後に結婚し、子供にも恵まれました。いつか娘も連れてバックネルに行きたいな、というのが家族の夢です。

バックネルTA制度に興味のある皆様、ぜひ勇気をもって挑戦してください。

第8期

神内 未菜美

「非日常」な日常



一番左が神内さん
(3人目は同期の瀬瀬さん)

日本語の授業で使用していた教科書「げんき」は、今でも大切にクローゼットの棚にしまっています。時折、ふと引っ張り出して眺めていると、当時の思い出が鮮明に蘇ります。カフェテリアの甘すぎるクッキー、ラミネートしたフラッシュカードの重み、バスケの試合での“Go Bucknell”の大声援、キンと冷えた雪の日のキャンパス、帰国前日に目が腫れるくらい大号泣したこと…。バックネルでの日常は当たり前のもではなく、奇跡のような時間だったのだと、今更ながらに感じています。

バックネルで出会った友人達と過ごした時間もまた、私の宝物です。

連絡はあまり取らなくなりましたが、彼らのことは今でも心に近く感じています。また何より、勉強熱心でお茶目で温かい、そんな大好きな恩師に出会えたことは私にとって本当に幸運でした。

これまでバックネル大学TA奨学生制度を支えてくださった全ての方に感謝するとともに、本制度がこれからも長く続くことを願っています。

第9期

勝田 知里

もう1つの母校。小さな町で大きな経験を



右が勝田さん

もしも、アメリカで大学生になれたら？母語の日本語で誰かの役に立てたら？そんな夢を叶えてくれたのが、このTA制度でした。

落ち着いた小さな町で、世界中から集まった学生たちと第二の大学生活を送る。10年経っても思い出す、出会った人々、クラスの景色、大好きな通りに美しい夕焼け。ほわっと温かい、心のふるさとの一つになりました。

TA業務では既出範囲の日本語を使ったり、書き順を改めて見直したりするなど難しさも感じました。それでも、充実した教材と前向きな学生たち、友人やホストファミリーに支えられ、乗り越えられました。今でも、当時の友人に会いに行ったり、日本で再会したり。名市大入学前には想像もしていなかった、一生の財産となりました。

この貴重な機会に、ぜひTAに挑戦してみませんか。

現地の充実した教育環境や広くて豊かなキャンパスでの時間を、ぜひご自身で味わってきてください。バックネルが、あなたを待っています。

第9期

鈴木 桃子

成長する若者のそばで思うこと



2023年6月に開催された「20周年の集い」にて。右から2人目が鈴木さん

卒業後、高校で英語を教えています。教員という仕事の一番の魅力は、生徒が殻を破る瞬間に立ち会えることです。

2022年8月、全国から集まった高校生14名と共に、アメリカ・ロサンゼルスにて約2週間のリーダーシップ研修に参加しました。研修初日、ある生徒が目に涙をためて訴えてきました。「桃子先生どうしよう。全然英語が分からなくてディスカッションで何も言えなかった」励ましながら話を聞いていると、彼女は肩を落としてつぶやきました。「本当は私には伝えたいことが無いのかも」LAでの学びをスピーチする最終日、彼女は胸を張って、未来への抱負を述べました。

I found people studying here very motivated, and I was so surprised to see them. I want to change my closed ways of thinking and devote myself to the society, so I decided to study English harder.

思い返せば学生時代、そばにはいつも、私のことを信じて応援してくださる先生方がいました。私も土を耕し、新芽に水をやり、若葉が育つのを待ちましょう。今度は私の番です。がんばります。

第10期

岸川 侑磨

What brought me to becoming a teacher



高校生の時から挑戦したかったTA奨学生に10年という節目の年に派遣していただき、とても嬉しかったことを今でも覚えています。現地では英語ができないこと、TAとしての未熟な部分に直面する辛い時間もありました。しかし、たくさんの優しい友人や先生方に支えられ過ごした1年は言葉では表現できないほど充実していました。

私は教員を志望していたので、「教える」ということを経験できたことは大変貴重でした。ロフグレン先生、アームストロング先生からご指導をいただきながら、授業案を考えそれを実践する。教育実習でもこんなに細かく見てもらえる時間はありません。とりわけ、外国語を教えるときの雰囲気づくりが大切という教へは、教壇に立つ私のバイブルでありこの留学を通して教員生活の基礎が出来あがったといっても過言ではありません。今は、この留学生活で得た知識や経験を次の世代へとつないでいきたいと考えています。

第10期

田川 朋

感謝の気持ちでいっぱいのTA制度



右から4人目が田川さん
(一番左は同期の岸川さん)

バックネルで得られた最大の気付きは、世界の情勢はまだしも、日本のことさえ何も知らないと感じたことでした。アメリカだけではなくヨーロッパや中東・南米など世界各国から様々なバックグラウンドを持つ学生と出会い意見を交わしたことで、政治や言語・文化など自分の関心の幅を広げることができました。その経験があるからこそ、世界各地で起こったニュースが身近なものに感じられていると思っています。

また日本語TAの活動では、日本語で一生懸命話しかけてくれた生徒、最後の方では会話ができるまで上達した生徒、一人一人の顔を鮮明におぼえています。自分の国の言語や文化に関心を持ってくれる生徒がこんなにもいたことで、一層日本を誇らしく思っています。

今でもバックネルで出会った友人とはコンタクトを取っています。バックネルでの経験は自分の視野を広げてくれるだけではなく、一生涯の友人をもつことができました。

第11期

福本 若菜

多様な価値観に触れ、視野が広がる日々



右奥が福本さん

バックネル大学で過ごした日々を思い返すと、唯一無二の経験ばかりでした。様々な国からきたTAとの旅行、学生が授業で覚えた日本語で一生懸命話しかけてくれた時の喜び、大学の広場からみる美しい夕陽、今でもはっきりと覚えています。

その中で特に印象に残っているのは、バックグラウンドが全く異なる友人達からきた、彼らの過去や国の話です。アメリカに来て星空を初めて見たという中国語TAの話、サウジアラビアでは酒が禁止されているからここでたくさん飲むんだという話、中でも、幼い時にチベットから山を抜けて命からがら逃げ出したという話を学生から聞いた時には、強い衝撃を受けました。それまでどこか遠い所で起きていると認識していた事をとて身近に感じ、自分が恵まれていた事に気付かされた出来事でした。これらの経験は私の価値観を変え、視野を広げてくれました。非常に貴重な機会を与えてくださった事に感謝の気持ちでいっぱいです。

第11期

安井 泉帆

宝物



2列目左が安井さん

TAとしての経験は今でもはっきり思い出せるほど、自分の中では最大で最高の経験でした。現地の大学生と同じ授業を受けたり、議論を交わしたり、1週間一人旅に出たり、肺炎にかかり救急にかかったことも今では良い思い出です。そして何よりも宝物だと言えるのはこの経験を通して、「教える」ことに対しての大変さと喜びを学び、それを自分の一生の仕事にしようと思ったことです。

大学2年生のとき、この奨学生制度に応募しようと思ったのですが、なかなか勇気が出ずに躊躇してしまい、猛烈に後悔したのを覚えています。そして大学3年生の時に最初で最後になると思い応募し、この素晴らしい、貴重な経験を得ることができました。後輩のみなさん、少しの勇気と行動で世界が変わります。何事にも恐れずに挑戦できる無敵の時期が大学生です。未知の世界に一歩足を踏み入れて自分の世界を切り開いてください。それがあなたの宝物になるはずです。

第12・
13期

野津 寛輝

決して手放したくない大切な記憶



中央が野津さん

バックネル大学で過ごした約2年間は、これまでの人生で経験したどれよりも取って代えることのできないほど大切な記憶です。こうして思い出して書いている間にも心の奥が熱くなるような思いがします。

今思えば、初めてのアメリカでワクワクしつつも、日本語TAとしての任務を果たせるのだろうか初めはかなり緊張していたことを覚えています。しかし、いざ始まってみればそんな緊張も不安も吹っ飛んでしまうほど刺激と発見にあふれた毎日でした。そんな毎日を送れたのはひとえに、もう一人の心強い日本語TA、家族のように何でも話し合えるルームメイト、どんな時も親身になって相談になってくれる名市大とバックネルの先生方のおかげです。

大学を卒業して時間が経った今でも、この経験は自分らしく生きていく大きな糧となっています。

そして、これからもこの素晴らしい制度が多くの人にとっての大切な存在として、末長く続いていくことを願っています。

第12期

黒葛野 隼人

人生の礎



約7年ぶりに再会したルームメイトと

映画に出てくるような美しい校舎と自然、勉学に真摯に励む学生に囲まれて、発見と学びに溢れた1年を過ごしました。アフリカの歴史の授業では、祖先が黒人奴隷として海を渡ってきたと告白する学生と出会い、雷に打たれたような衝撃が走ったことを今でも覚えています。

日本語の授業では、先生方とTAの野津君に支えられながら、日本語のみで教えるというユニークな経験を積むことができました。生徒から自分にとっては当たり前のことを質問されることもあり、教えるより教えてもらうことの方が多かったです。

先生方の働く姿を見た当時の自分は、情熱に従って仕事をしたいと強く思うようになりました。卒業後は、国際協力の業界で、オセアニア地域で医療や教育開発の案件に携わりました。現在は教育IT系の企業に転職し、世界中にサービスを届けるべく奔走しております。このような貴重な機会を築き、またここまでバトンを繋いでくださった皆様に感謝申し上げます。

第14期

亀山 涼香

豊かな見方と生き方を知る



左が亀山さん

日本語の授業をする中で、日本語と英語の違いをより色濃く知りました。他の国からのTAは英語を含め互いの言語の共通点を話していることがありました。その話題に共感できないことの寂しさもありましたが、他者が容易に理解できない言語を操ることの誇らしさもまた感じました。日本語と英語の言語としての違いをそれ以前は恨めしく思っていたのですが、その違いは日本語という言語の面白さや愛着に変わっていきました。

また、フランス人のルームメイトとの出会いは今の生き方に大きく関わっています。彼女は家族を、友達を、恋人を、本当に大切にしていました。彼女の周りの人はいつも幸せそうで、彼女を見て、大切な人に大切だとちゃんと伝える生き方を心がけるようになりました。

バックネル大学での生活から気付きや出会いによって、人生がより美しく豊かなものを感じられるようになりました。多くの方々にこの経験が繋がっていくことを願っています。

第14期

大野 愛希

人生の教訓を得た留学



「大学入学後は絶対留学し、留学中に特別な経験をしたい」と考えていた私に、バックネル大学TA制度はぴったりでした。興味があったフランス語と英文学を追求しつつ、TAとして働くことができた9か月間は、多くの学びがありました。その一つに「相手の意図を知ろうとすること、実践する意思を持つことの大切さ」があります。TAの時は、「なぜこの方法で日本語を教えるのか」「なぜこの順番で勉強していくのか」など、常にアメリカ人の教授が組んだカリキュラムを理解しようと努めました。結果、大きな信頼を得て、多くのことを任せていただきました。

これは、現在社会人として海外勤務を目指し働いているなかでも活かされている教訓です。

バックネル大学TA制度を利用したことで、語学力の向上はもちろん、人としての大きな成長がありました。これは留学前・留学中それぞれの場面で勇気を出して行動したおかげだと思います。後悔しないように目指す道を進んでください。

第15期

榎本 愛生

可能性を広げてくれる学びに溢れた留学経験



バックネル大学での生活は毎日が刺激に溢れていました。他国から来ているTA達と毎日英語で生活すること、現地の学生と共に英語で授業を受けること、学生の前に立って授業をすること、そのために日本語の教授の指導の下授業プランを作成すること。たくさんの初めての経験に触れながらそのたびに悩み、努力することで、一年後、自分の中の多くの変化や成長に気づくことができる、そんな一年だったと振り返ります。

バックネルで出会った、日本語の教授と学生、自分の履修している授業の教授と学生、そしてTA達との関わりの中で「もっと自分を高め、挑戦していきたい」と思いが芽生え、現在はアメリカのインディアナ大学の大学院生として第二言語習得のを勉強をしています。バックネルでの経験がなければアメリカの大学院生になることなどできませんでした。その後の私の進路の可能性を大きく広げてくれた、何ものにも代えがたい、貴重な学びの経験です。

第15期

相原 光志

今の自分の根源となった経験



左から2人目が相原さん

バックネルほど恵まれた環境は稀有である、社会人になり世界が広がった今でもそう強く思います。

真剣な眼差しを向ける学生の前で教鞭をとり、活発な現地の学生とともにハイレベルな内容の授業を受け、困った時親切に助けてくださる先生方、最高のTAの仲間たちや友達に恵まれていました。日本語の授業作りには緻密な設計が求められ、履修していた授業もA4サイズで100ページを超える課題が出されることもありましたが、決して楽ではありませんでしたが、必死に向き合えば向き合うほど自分に返ってくる、そんな環境だったと思います。

私は常に「今がベスト」と思えるように行動したい性格なので「あの頃の方が良かった」と思うタイプではありませんが、それでもバックネルは心の底から最高だったと今でも思います。バックネルで培ったものが、今の自分の根源となり自信に繋がっています。

このような貴重な機会をいただけたことに、この上なく感謝しています。

第18期

高木 萌々佳

バックネルでの出会い



バックネル大学での10ヶ月は自分の世界をさらに広げてくれるものでした。他国から集まったTAや生徒、友人の生活や活躍を見ていると何か自分にももっとできることがあるのではないかと問いを自分に投げかけられている気がしてもっとやってみようという気持ちが強く駆り立てられました。

社会のルールから外れるともう2度とそのルールには戻れないのではないかとプレッシャーが大きいのが日本社会の見えないプレッシャーなのかなと私は思います。しかし、一瞬そのルールの外を覗いてみると無数のルールがあってもまだ見ぬ冒険もたくさんあります。私自身より3倍濃い人生、後悔のない人生を生き抜くことが人生の目標です。もしルールから外れることを恐れている人がいたら少し停まって自分の周りを見てみるとあたらしい世界が広がっているかもしれないということを心に留めておいてほしいです。

第18期

井上 恵美里

帰国から半年が経って



アメリカから帰国して約半年が過ぎました。滞在期間中は、数々の出会いと貴重な経験に恵まれ、私の価値観や進路を大きく変えました。帰国後は、卒業論文を執筆しながら、大学院進学準備を行いました。日本語の授業を受講していた一部の学生達と日本で再会することもありました。卒業後は、アメリカの大学院で環境政策について学ぶ予定です。ペンシルベニア州から離れることとなりますが、いつかまたルイスバーグを訪れたいと思います。

TA 奨学生制度に応募する前、プログラムについて理解を深めたいと思い、面接への不安を抱きながら国際交流センターで『10周年記念誌』を読みました。今回、『20周年記念誌』の作成に関わる機会を得られたことを光栄に思います。編入学から留学を経て3年間、沢山の皆さまに大変お世話になりました。これからも、1人でも多くの方がTAとしてバックネル大学で素晴らしい時間を過ごせることを願っています。

第19期

大和 礼奈

Teaching is Learning! 人生の糧となる最高の1年間！



バックネル大学TA制度20周年おめでとうございます。学部生ながらもTAとして日本語を教える経験と、留学生として学問を学ぶ経験を同時に得られるこの制度は、本当に貴重だと思います。日本語の授業においては、「どのように限りある時間の中で、最大限生徒の主体性を引き出せるか」という観点に基づき、日々試行錯誤を重ねていました。生徒のニーズと教育理念の両面を汲み取りながら、自分で考えた授業内容を実践できることがTAの仕事の醍醐味だと思います。自分の生徒達がどんどん成長していく姿を間近で見れることほど、やり甲斐を感じる瞬間はありません。

バックネル大学は多様性と可能性に満ちた環境であり、様々なバックグラウンドを持つ学生との交流や世界各国のTAとの共同生活は、今の私の人生に大きな影響を与えています。この留学経験を通じて培った国際的視野、マネジメントスキル、指導力は、今後迎える社会人生活にも必ず生きてくると思います。

第19期

小竹 若菜

10か月間の挑戦と生徒への贈りもの



右から2人目が小竹さん
(一番右は同期の大和さん)

美しい自然に囲まれたキャンパスで、さまざまな文化的背景を持つ学生との異文化を交流し、貴重な教育実践経験を積んだ10か月間でした。特に日本語TAとして実際に授業を計画・展開し生徒たちを導くという機会は、将来教師を志す私にとって非常に有意義な経験でした。非日本語母語話者である生徒に正しい日本語の読み書きを指導することは容易ではありません。生徒が克服しなければならないハードルをできる限り低くし、壁に直面した時には気軽に頼れる存在であることがTAの役割です。生徒の習得度の差に合わせたレッスンプランを立てたり、向上心を維持したりすることは容易ではありませんが、探究のしがいがあります。また、生徒が学習した日本語で自分の考えを表現してくれる時には、一緒に学習をしてきた身としてこの上ない喜びを感じられます。現地で日本の魅力や日本語を学ぶ楽しさを伝えることで、TAとしてのいち使命を果たすことができたと思っています。

Chapter
3

教員からのメッセージ

Bucknell University

Elizabeth L. Armstrong, East Asian Studies

It has been my privilege to be involved in and the beneficiary of the Bucknell/Nagoya City University TA Fellowship Program. There is no doubt that Bucknell's Japanese Language Program has been served with enthusiasm and dedication by each and every one of the TAs. Over the past twenty years our TAs have contributed good will, good cheer and good engagement to the language learning life of our students. Certainly, the TAs will stay in the hearts and minds of all those who encountered them. I have enjoyed taking on the thrills and challenges of Japanese language teaching with the TAs by my side, always at the ready to provide support and reinforcement. I have enormous gratitude for the TAs and also the NCU faculty members who worked tirelessly to make the TA Fellowship a success.



Erick R. Lofgren, East Asian Studies

For two decades we have benefitted from our relationship with Nagoya City University. The students who have come to Bucknell to serve as TAs have enriched our lives and those of the students in our classes. It is quite a decision to spend an academic year abroad, and it is even more so to do so both as a student and an employee. The resilience shown by the many NCU students who have made the decision to pursue this fellowship is remarkable and affirming. Of course, this all would not have been possible but for the vision and tireless efforts of Professor Hiki Mitsuru. We owe him an unpayable debt of gratitude for skillfully and tirelessly shepherding the program along, and for sending us such a wonderfully varied range of TAs across these many years.



人文社会学部 国際文化学科 日木 満

『バックネル大学TA奨学生制度』が20年目を迎えることができたことを大変嬉しく思います。受け入れ先のアームストロング先生とロフグレン先生にはまさに本当の親のような温かさで派遣学生たちを見守っていただきました。日本語教育の訓練を特に受けているわけでない派遣学生を毎年ゼロからご指導いただき、立派なTAに育てあげるといえるのは、想像を絶するご苦労だったに違いありません。私たちの学生がお二人に見守られているという安心感は、覚え書きのどこにも書かれていませんが、実は本制度の核心であり、20年間続いた一番の理由です。ありがとうございました。

歴代TAの責任感と努力にも敬意と感謝の気持ちで一杯です。何を隠そう私も昔アメリカの大学院で日本語TAをした経験がありますので、その大変さは想像できます。大学院生であった私ですが、正直なところ私には荷が重すぎてうまくできませんでした。それを名市大の学生は学部生のとき（もしくは卒業直後）に経験するわけですから、さらに大変なはずですが、その大変さを大きく超える達成感を感じながらTAとして立派に活躍してくれました。それがお世辞や大げさな表現でないことは、歴代TAのメッセージからわかってもらえると思います。TA経験者の皆さんが帰国後、進む道は違ってもそれぞれの道でバックネル大学での経験を生かして活躍している様子を見させてもらったことは教員として本当に幸せなことでした。

私は今年度末（2024年3月末）で定年退職となります。バックネルの先生方、国際文化学科の先生方、将来のTAの皆さん、あとをよろしく申し上げます。

人文社会学部 国際文化学科 川本 徹

バックネル大学TA奨学生制度は、国際文化学科の看板的なプログラムで、この制度を知った高校生がそれをきっかけに名市大を受験することもあります。20周年を迎えるにあたり、この素晴らしい制度を築いてこられた両大学の先生方に、深い感謝を捧げます。

2023年の秋、私は初めてバックネル大学を訪問する機会を得ました。キャンパスやルイスバーグの町並み（素敵な映画館がある！）が忘れられません。しかし、何より印象に残っているのは、バックネル大学の日本語教育の質の高さと、そこにかけるアームストロング先生とロフグレン先生の情熱です。そしてまた、名市大のTAたちがこの教育に携わり、生き生きと授業をしている様子に、心打たれました。

20年の歴史に思いを馳せつつ、今後のプログラムの継続に向けて、尽力していきたいと思います。

人文社会学部 国際文化学科 Andrea Castiglioni

4年間バックネル大学に派遣するNCUの学生を選ぶ日本語TAプログラムに携わった。この留学とTAの経験が、NCUの学生の文化的側面と将来の進路の両方に有益な効果をもたらすことを、私は目の当たりにしてきた。Armstrong先生とLofgren先生の現地指導の下、NCUのTA留学生は洗練された日本語教授法を身につけることができただけでなく、人間的にも大きく成長することができた。20年間この日本語教育TAプログラムは、日米間の言語的・知的交流の真の架け橋となり、海を隔てた両国に無限かつ真の利益をもたらしてきた。知識の普及と相互理解の名の下に、日米両大学を常に結びつけてきた深い友好関係をより強固なものにしながら、この協力開始20周年という記念すべき日が、今後とも無限に繰り返されることを願ってやまない。

人文社会学部 国際文化学科 山本 明代

バックネル大学へのTA派遣20周年にあたって、この事業にご尽力くださったバックネル大学のエリザベス・L・アームストロング先生とエリック・R・ロフグレン先生、そして名市大の同僚である日本満先生に、心から感謝の言葉をお送りいたします。この3人の先生方が唯一無二の魅力的なプログラムを作成し、派遣された学生たちの力を引き出し、それを増幅させて発揮できる貴重な機会を作ってくださいました。派遣学生たちもそれに応え、留学終了後も活躍した姿をオープンキャンパスで高校生に紹介してくれたことで、このプログラムに参加することを目標にして本学科に入学した学生も多数いました。

私はバックネル大学TA派遣委員を2回勤めさせていただき、派遣されたゼミの学生がいたことで、帰国した学生たちが大きく成長したことを知っていましたが、2023年6月11日に行った20周年記念イベントで、アームストロング先生を囲んで参加してくれた多くの元派遣学生とお会いし、卒業生たちがTA派遣で得た経験を元に、それぞれの場で仕事や趣味を通して、各々の交流や発信を行っていることがわかり、このプログラムの教育上の意味とさらなる広がりを感じることができました。次の10年に向けて、国際文化学科の教員が協力してこのプログラムを発展させていくことができたらと思っています。

人文社会学部 国際文化学科 平田 雅己

2015年3月、私はバックネル大学を初訪問し、第10期TAの岸川さんと田川さんの日本語ティーチングを視察しました。その時、私は二人の素晴らしい仕事ぶりもさることながら、日本から遠く離れたこの大学に日本語学習に関心のあるアメリカ人の大学生が数多くいるという単純な事実に感銘を受けたことを覚えています。

外国語学習は異文化理解の基本であり、異文化理解は持続可能な国際平和の構築にとって必要不可欠な要素です。世界や日本社会の現状をみると、自分と異なる他者を積極的に理解しようとするのではなく、一方的に危険視し力で排除する傾向が益々強くなっている印象を抱いております。TAを経験したOB・OGの皆様にはそうした傾向に加担しない生き方、具体的には分断と排除の壁よりも、共生と対話の橋を築くことに重きを置く生き方を志向してほしいと切に願っております。

人文社会学部 心理教育学科 椎名 渉子

私の所属学科は異なりますが日本語教育に携わっていることから、2023年10月にバックネル大学を訪問し、TAたちのクラスに見学に行かせていただきました。綿密に練られた教案をもとに、1分も無駄にせず、学生たちの学びを主導するTAたちの頼もしい姿に感動しました。

さらに感動したのは週1回行われる、アームストロング先生、ロフグレン先生とTAたちとのミーティングです。学生たちの学びの進捗を共有し合い、次回授業に備える時間を十分にとってくださいました。学生たち一人ひとりに向き合う丁寧な指導とは何か、教育に携わる者として多くのことを勉強させていただきました。

本学とこのような貴重な交流を続けてくださっているアームストロング先生、ロフグレン先生をはじめバックネル大学のみなさまに心より感謝申し上げます。そして、これからもこの素晴らしい学びの交流が続けられますよう、名市大教員の一人としてできる限りのことをしていきたいと思っております。

バックネル大学と名古屋市立大学は、TA奨学生制度を中心にしながら、相互にさまざまな学術交流を行ってきました。

※バックネル大学との学術交流には名古屋市立大学特別研究奨励費（2007、2008、2009、2011、2012、2014、2016、2023年度）の交付を受けました。

学術交流 年表

2004年 11月 「バックネル大学TA奨学生制度」覚え書き締結

(平成16)

2005年 8月 第1期TA派遣

(平成17)

2007年 11月19日～22日 バックネルウィーク開催。バックネル大学のArmstrong教授を招聘

(平成19)

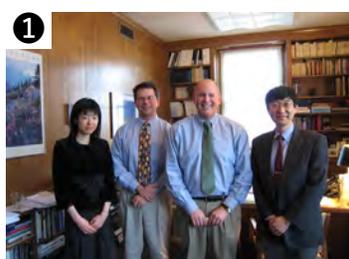
- 有賀克明人文社会学部長を表敬訪問 ①
- 西野仁雄学長を表敬訪問 ②
- バックネル大学TA奨学生制度説明会
【日時・場所】11月19日(月)16:30～17:30 [人文社会学部棟203教室]
- 講演会「国際交流と日本語教育」(一般公開) ③
【日時・場所】11月20日(火)16:30～17:30 [人文社会学部棟1階会議室]
- 授業参加
【日時・場所】11月22日(木)3限 [人文社会学部棟603セミナー室]
「谷口ゼミ」(読書会：寺山修司『赤糸で縫いとじられた物語』をアームストロング先生と読む)



2008年 1月27日～30日 日木と谷口がバックネル大学訪問

(平成20)

- バックネル大学East Asian Department学部長(28日)、TAプログラム担当部長(29日)を表敬訪問 ①
- 日本語授業視察：本学から派遣されているTAが担当している1年クラス(28日)と2年クラス(29日)を視察。ならびに、アームストロング先生担当の3年クラス(30日)に参加 ②
- 谷口幸代(日本文学)が日本語の上級クラス(J302)で川端康成について講義(29日)
- バックネル大学の教員との学術交流
 - ・日本文学：谷口(日本文学)とロフグレン教授(日本文学)(29日)
 - ・言語学：日木(英語学)とラビーン教授(言語学)(30日)
- バックネル大学の学生との交流：
 - Japanese Table(日本・日本語に関心のある学生の談話会)に参加



2008年
(平成20)

10月20日 Armstrong教授を招聘

- 国際交流担当理事 今川正良教授との会談 ①
- 「異文化交流論」(日木担当)に参加 ②
異文化としての日本語をテーマにした講演と受講生と交流
- 国際交流推進センター「国際交流談話会」参加



11月27日 Lofgren教授・Armstrong教授を招聘

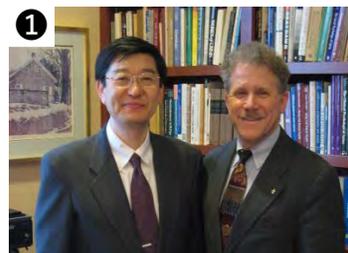
- 5期TA選考面接
- 寺田元一・国際文化学科長と意見交換 ①
- バックネル大学TA委員会と打ち合わせ
- 「日本文学ゼミ」(谷口担当)に参加。
大岡昇平の『野火』が提起する問題を討議 ②
- 「アメリカ文学ゼミ」(田中担当)に参加 ③
黒人差別をテーマにしたフォークナーの短編に関する討論や黒人大統領の選出の意味について意見交換
- 国際交流推進センター「国際交流談話会」参加



2009年
(平成21)

2月15日～18日 日木がバックネル大学訪問

- TAの授業参観
- Provost(副学長)のMick Smyers氏を表敬訪問 ①
- Dean of Arts and Sciences のChris Zappe 氏と
Assoc. Dean of Facultyの Bill Kenny 氏を表敬訪問
- East Asian Studies Dept.のOrr学科長を表敬訪問
- 日本語プログラムのMasako Hoyer先生と意見交換



2010年
(平成22)

1月4日～15日 バックネル大学 Lofgren教授を招聘

- 1月7日 「ゼミ (英語学)」に参加
- 1月12日 「総合英語 (1L)」 「ゼミ (英語学)」 「英文法各論」に参加
- 1月13日 公開講座を開催 ①

【タイトル】 「日本人泣かせの英語の名詞 vs. アメリカ人泣かせの日本語の名詞」
【講師】 Erik Lofgren (バックネル大学)
日木満 (名古屋市立大学)
【日時】 2010年1月13日16:30～18:00
【会場】 名古屋市立大学
滝子(山の畑)キャンパス 1号館202教室



- 1月13日 大学院生 (大岡昇平研究の研究指導)
- 谷口幸代ゼミ: 大岡昇平『野火』を読む
—エリック・ロフグレン教授を迎えてII—

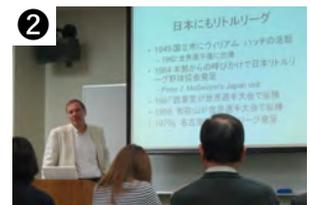
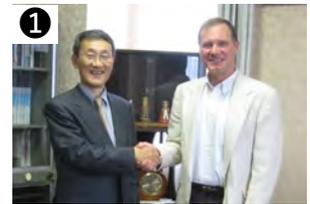
2月28日～3月7日 日木がバックネル大学を訪問

- 3月2日 ・バックネル大学Chris Zappe氏 (Dean of the College of Arts and Sciences) と Bill Kenny氏 (Associate Dean of Faculty) を表敬訪問
・Elizabeth Armstrong先生の「翻訳論」に参加
・日本語(2年生)の授業見学
- 3月3日 日本語(1年生)、日本語(3年生)の授業見学

3月15日～21日 バックネル大学 Orr 教授を招聘

- 3月16日 西野仁雄学長を表敬訪問 ①
- 3月16日から20日 Orr氏のリトルリーグの日米比較研究支援
- 3月18日 以下の公開講座を開催 ②

【タイトル】 「リトルリーグの日米比較: 組織と精神」
Little League in Japan and America: Structure and Spirit
【講師】 James Orr教授 (バックネル大学: 戦後日本)
【日時】 2010年3月18日 15:00～16:00
【会場】 名古屋市立大学 滝子キャンパス 1号館3階 301教室



2011年
(平成23)

9月12日～16日 日木、谷口の2名がバックネル大学を訪問

- TAの授業の視察(延べ8回)、TA奨学生制度の評価と覚え書きの更新についての協議、日本文学に関する特別講義(谷口)などを行った。
- 9月13日 日木がGeorge C. Shields氏 (Dean of the College of Art and Sciences)、Renee Gosson氏 (Associate Dean of Faculty)、Erick Lofgren氏 (Chair, the Department of East Asian Studies) と、TA奨学生制度の現状報告と覚え書きの更新協議を行い、今後さらに5年の更新を行うことで了解を得た。
- 9月13日 谷口(日本文学)が、アームストロング教授担当の「日本語上級クラス」に特別講師として参加し、川端康成について講義(「バッタと鈴虫」を読む)を行った。①
この特別講義は、日本人の専門家による日本語でのわかりやすい講義ということで受講生に大変好評であった。
- 日木はロフグレン教授の講義「Japanese Film as Anthropology」に参加。



2012年
(平成24)

11～12月にLofgren教授を招聘

- 11月28日 別所良美人文社会学部長を表敬訪問 ①
- 11月29日 戸荻創学長を表敬訪問 ②
- 11月29日 専門演習2(谷口担当)に参加 ③
「梅崎春生『B島風物誌』を読むーエリック・ロフグレン教授を迎えてⅢー」
- 11月29日 専門演習4(谷口担当)に参加：卒業論文・修士論文中間発表会
- 12月17日 講演会（人間文化研究科主催マンデーサロン） ④
【タイトル】「現在の留学のあり方～これでいいのか～」
【講師】エリック・ロフグレン教授
【会場】名古屋市立大学滝子(山の畑)キャンパス 1号館1階会議室



2015年
(平成27)

1月10日 滝子キャンパスで『バックネル大学TA派遣10周年記念行事』を開催

バックネル大学からエリック・ロフグレン教授を迎えて、郡健二郎学長、伊藤恭彦人文社会学部長にも臨席を賜り、歴代TA(7名)、次期TA予定学生(2名)、その次の派遣をめざす在学生らが参加。TA委員会からバックネル大学TA奨学生制度の歴史と現状の報告が行われ、続いてロフグレン教授から記念スピーチと記念品の贈呈があった。バックネル大学と名古屋市立大学の間で、本TA制度の10年を振り返り、今後のさらなる発展を確認し合った。

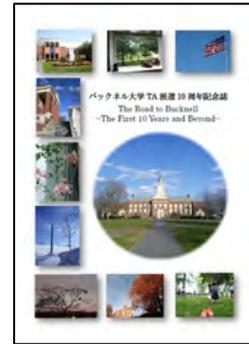


3月23日～24日 平田がバックネル大学を訪問

- 副学長表敬訪問
- TAの授業(日本語初級と中級)見学
- アームストロング先生の日本語授業(上級)の見学
- オア先生(日本近代史)の日本史授業の見学、その後、学術交流の可能性についての協議
- ロフグレン先生、アームストロング先生とTA奨学生制度全般についての協議、等を行った。

2015年
(平成27)

3月30日 『バックネル大学TA派遣10周年記念誌
The Road to Bucknell ~The First 10 Years and Beyond~』を発行



2017年
(平成29)

1月13日 バックネル大学 Lofgren教授を招聘

- 人文社会学部学部長室にて、伊藤恭彦人文社会学部長とErik Lofgren バックネル大学東アジア学科・学科長代行との間で『バックネル大学・名古屋市立大学TA奨学生制度』の更新の協議を行い、本制度が両者にとって有益な制度であることが確認され、新しい覚書に調印し、さらに5年の協定期間の延長が決定した。①
- 上記協定更新調印式後、ロフグレン バックネル大学東アジア学科・学科長代行が郡健二郎学長を表敬訪問 ②



2月12日～24日 バックネル大学 Orr教授（日本近現代史）を招聘

- 特別講演会開催
(一般公開：名古屋市立大学人間文化研究所・バックネル大学日本語TA委員会共催)

【日 時】 2017年2月18日 (土) 14:00～15:30

【会 場】 名古屋市立大学滝子キャンパス1号館203教室

【演 題】 日本人の戦争記憶における空襲犠牲者

【講 師】 ジェームズ・オア

(バックネル大学東アジア研究科准教授、日本近現代史)

【内 容】 1960年代後半に台頭する日本の空襲記録運動の形成過程に関する歴史社会的分析から、それらの運動が日本人の集団的な戦争記憶のあり方に与えた影響を明らかにすると同時に、日本的な戦争記憶の特徴・課題・展望を提示。
講演はすべて日本語。

【司 会】 平田雅己 (名古屋市立大学准教授、アメリカ現代史)



- 教員との研究交流

①平田雅己 (アメリカ政治外交史、国際関係論)

- ・上記講演会ならびにオア准教授の研究 (日本近代史) のための資料収集支援
- ・ピースあいち訪問に同行し、資料収集ならびに平和研究者との交流支援

②土屋有里子 (日本文学、比較説話学、日本文化)

- ・オア准教授の熱田神宮、徳川美術館の調査訪問(2月24日)に同行し、日本文化に関する研究支援

③日本満 (英語学)

- ・オア准教授に英語のネイティブインフォーマントとして英語の名詞形研究に協力してもらう
(招聘期間中毎日)

- 2月14日 オア准教授、国際文化学科学科会議に参加。派遣中の第12期TAについての報告、意見・情報交換を行った。
- 2月18日 オア准教授に市民学びの会の学習サークル「英字新聞を読む会」の月例会にゲストとして参加してもらい、交流をはかった。

2023年
(令和5)

6月11日 バックネル大学TA奨学生制度20周年記念行事を開催

【日時】 2023年6月11日（日） 10:00～13:30

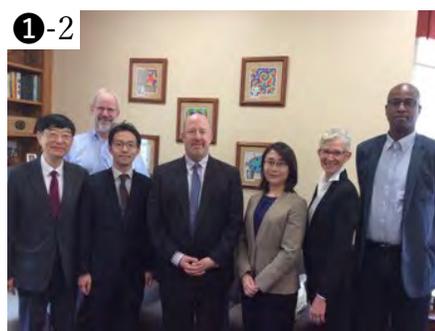
【会場】 名古屋市立大学滝子キャンパス1号館1階会議室

【参加者】 Prof. Elizabeth Armstrong (Bucknell University)
Prof. Erik Lofgren (Bucknell University) Zoom参加
野中壽子（人文社会学部長）
椎名渉子（国際交流）
歴代TA経験者（19名：うち3名はZoom参加）
次期TA予定者（2名）
TA委員（日木満、アンドレア・カスティリオーニ、
山本明代、川本徹）



10月10日～13日 バックネル大学訪問（川本、椎名、日木）

- 10月11日 8:00-8:50 川本がロフグレン教授のFoundation Seminar（日本映画）にゲスト参加
9:00-9:50 川本・椎名・日木がFLTA Coordinator(TAの総括者)のDena Isleem教授を表敬訪問
- 10月12日 10:00-10:50 川本・椎名・日木がKarl Voss教授（Dean of College of Arts & Sciences）と
Anthony Stewart教授（Associate Dean of Faculty of CAS）を表敬訪問 ①



13:00-13:50 椎名、川本が、アームストロング教授の上級日本語クラス（301）にゲスト参加（寺山修司「まぼろしのミレナ」を読む）

14:30-16:00 ロフグレン教授とアームストロング教授と川本、椎名、日木でTA Programの今後についての意見交換

- TAの授業（5クラス）を見学

2024年
(令和6)

3月「バックネル大学・名古屋市立大学 TA奨学生制度 20周年記念誌」刊行

そして未来へ

Chapter
5

Photo Gallery

思い出の写真集



アームストロング先生と第0期TA



パジャマになってもおしゃべりした夜



日本食パーティー



オフィシアワーズ



カフェの甘いお菓子



バスケの試合



フラッシュカード



雪の日のキャンパス





バックネル大学から寄贈された10周年の記念品



TAのオフィス



学生手書きのTA説明会ポスター



ハロウィンパーティーにて



バレーボール校内大会でTA・留学生チーム優勝



テキスト「げんき」を手に



バックネル大学のシンボル、図書館



アームストロング先生と最初の対面打ち合わせ/
名市大にて



カフェテリアの食事



授業風景



図書館の夜景



バックネル大学での授業風景



カフェテリアの巨大アイスクリーム



現地の小学校を訪問



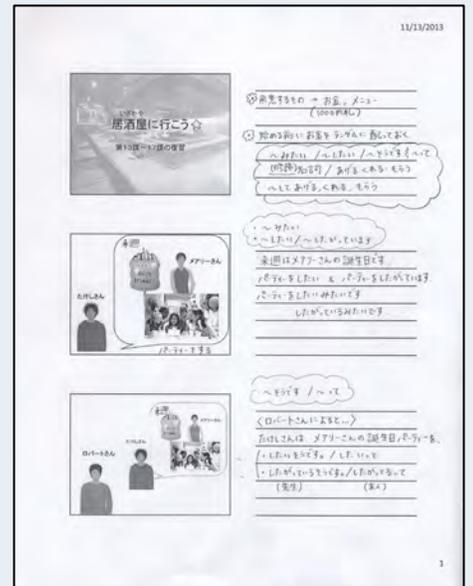
折り紙で作った名札



寮の部屋



授業に使用したパワポ資料の一部



手元の授業メモ



若き日の日木先生とロフグレン先生



アームストロング先生と



2023年10月バックネル大学を訪問 (左から川本先生・椎名先生・ロフグレン先生・アームストロング先生)

バックネル大学・TA奨学生制度 関連webサイト

◆Bucknell University



◆バックネル大学TA通信(人文社会学部オリジナルサイト)



◆学科 カリキュラムの特色



◆体験談 (大学サイト)



◆卒業生の留学体験記



バックネル大学・名古屋市立大学TA奨学生制度 20周年記念誌

発行日 2024年3月22日

発行者 名古屋市立大学 人文社会学部 国際文化学科

2023年度 バックネル大学TA委員会

(日木満・Andrea Castiglioni・山本明代・川本徹)

愛知県名古屋市昭和区瑞穂区山の畑字1

編集 国際文化学科事務室 河合千鶴子